

最初の七ブロック



今は、お望みとあらば一〇月、一〇月か十一月、六〇年か六一年、おそらくは一〇月の一日か一日、それともおそらくは二三日か二三日、まあ一九六一年の一〇月二三日としておこう——どうだっていいじゃないか。

レト——アンヘル・レト、ね？——レトの話だった、はつい数秒前に並木通りの角でバスを降りたばかり、というのも急に、歩きたい、目抜き通りのサン・マルティン通りを足で端から端まで歩きたい、数カ月前から根気はあっても熱意なく帳簿片手に訪問するあれやこれやの店の一つに入って薄暗い中二階に閉じこもるのではなく陽の降り注ぐ朝に包まれていたい、そんな気分を駆られたのだった。

降りるのに焦ってバスに乗ろうとする乗客たちにぶつかり、彼らの中に一瞬漠とした抗議の波を呼び起こしながらも彼は、その青いバスが一刻も早く発車し、金属音を響かせながら並木通りを横切って中心街方面へ去っていくようお願いつつ、並木通りの半ば植込み半ば舗道の中央分離帯に分かたれた二本

の車線を渡り、熱を発しながらゆるやかに両側を走る車群をかわして反対側の歩道にたどり着いてから、角のタバコ屋でバルティックラレス一パックとマッチを買って半袖シャツのポケットにしまい、数メートル進んで今しがた角にたどり着いたところで、その角を曲がると南を向き、東側の歩道、つまりこの時間帯では日陰側の歩道に入って、サン・マルティン通り、つまり目抜き通りを歩きます。並行する二本の歩道は中心街に近づくにつれ、商店、レコード屋、靴屋、小売店、服地屋、喫茶店、本屋、銀行、香水屋、宝石店、教会、画廊、タバコ屋でごった返すものの、その末端、商店の房も痩せ細りついには溶けてなくなる頃になると、優雅に気取ったファサードがその姿を誇示するようになり、もちろん一軒家も混じってくるが、少なからぬ割合で玄關脇にブロンズ製の表札が飾られていて、住人の職業、つまり医者、弁護士、公証人、技師、建築士、耳鼻科医、放射線科医、歯科医、公認会計士、生化学者、競売人——一言でいえば、つまるところ、あるいはより正確に二言というべきか、そんな諸々、を告げている。

朝起きてシャワーを浴び、朝食をとってから中心街の陽の下へと繰り出したこの男は、間違ひなく自分のベッドよりもはるか彼方、自分の寝室のそれよりも大きく濃密な暗闇からやってきたのだろう。世の中の何であれ誰であれ、なぜレトが今朝、普段どおり仕事に行かず、今こうしてのんびり無表情で、連なる家の影をさらに濃くする木々の下、サン・マルティン通りを南に向かつて歩いているのか言い当てることはできないだろう。あの男、そんなに苦しかったのね、朝食の最中に母親のイサベルが、向こうは向こうで仕事に出る前、そんな言葉を漏らして、そのあと独りになってレトは、二杯目のコーヒークップを手に裏庭へ出たのだった。その男、そんなに苦しかったあの男はすでに、日陰になった隅の

芝生も植込みも植木鉢も花壇も夜露の湿り気を保っている、花咲く手狭な庭を散策するうちに彼の心象から消え去ってしまったものの、彼の体の隅々、さらにその延長上の触知できない箇所では依然、その脆く散漫とした反響が続いている。おそらく目抜き通りの家々の足元にいまだ根を下ろす濃い湿った影、あるいは何軒かの家の前庭で目を引く、春の木立が見せるその湿気と煌めきの入り混じった様子が、ふたたびレトの中に母親の表現を、その顔と決まり文句とが織り成す二重の意味を伴って浮かび上がらせているのだ。増しつとあるとはいえ穏やかな暑さの中をいまだ漂う朝の湿気は、根強く居残ってはいるが切れぎれの、奇妙でもあればお馴染みでもある母の姿へと、連想の力で彼を吸い寄せる。彼女は台所のガスコンロから湯気の立つコーヒーポットを手に戻ってくる途中、思いに沈んだような小声で、独り言のように、ついさっきまでの話とは何の脈絡もなく、あの言葉を発したのだった。あの男、そんなに苦しかったのね。朝の台所の薄暗がりでは、彼女がコーヒーとミルクと水とトーストを下げ、やがて湯気の立つコーヒーポットを手にテーブルへ戻ってきたのちも、ガスの青白い炎が、綺麗に揃った円冠状に集い、その背後で燃え続けている。レトにとって、ついさっき台所に響いては消えたその言葉は、母親の主張が往々にしてまとう曖昧さを帯びているため、彼はその正確な意味になかなか思い当たれずにいる。そして慎みとおそらくは羞恥心にも打ち克って顔を上げ、イサベルの表情を吟味しだすものの、あの曖昧さの裏には何か考えがあるのでという疑念はつるばかり。というのも、奥の青白い炎に向かつて、もういささか締まりのないイサベルの体は音も立てず進んでいき、伏せられたまま彼の視線を避けるその両目からは、どんな詮索も組み立てられないのだ。朝食時の機械的なやりとりの最中、つまり交わされる言葉といえ、いるのかどうかも定かでないような存在を礼儀上示すべく放たれるもので、

皿や食器がぶつかる音ほどの意味と広がりしか持たない、そんなやりとりの最中に彼女は、思いもかけず、その言葉をこぼしたのだった。そしてレトはひと口目のコーヒを啜りながら、彼女がテーブルの向かいに座るのを眺めつつ、考えだした。「間違ひなく、恥辱を消し去りたいと願っているからこそ、あの男がそんなにも苦しんだと言ひ張っているんだ」。とはいへ、レトの頭がふたたびもたげられ目線の向いた先には、まだあとけなさを残しているとはいへ、すでに弛みかかった顔が、瞼を閉じたまま、何も表には出すまいとしているだけだ。「わかかってやってるのか？ 自覚してるのか？ こっちに探りを入れてるのか？ 試してるのか？」一番厄介なのは、しかしながら、あまりの距離の隔たりに、何と応じたらいいのかということだ。もし、無論、知ってさえいければ、レトは丁重に、そして何よりも安堵して、彼女が待ち望んでいる答えを返す気はあるものの、彼女はどうか自ら自棄を起こして無理難題をふっかけ、彼が自力でその答えを当ててみせるのを望んでいるらしく、だからこそ、何らの助けも差し伸べない。レトは探し求め、躊躇する。そうしたのち、自信なさげな様子で、ただし、この手の言葉に応じるときは常で、恨みなしとはいかないぞとばかり、何も口に出さない。おそらく失望と少なからぬ安堵に支配された、どこかぶつきらばうで、双方にとって煩わしい沈黙が続くものの、イサベルがコーヒークップのカフェオレを一息に飲み干し、最後のトースターを騒々しく噛み砕いて沈黙を破ると、ただ抑揚だけが曖昧さを伝えはするものの齒のあいだから無感動にそれとなく発せられるだけの、くすんだおざなりの言い回しが次々と戻ってくる。そんな言い回しも、間違ひなく、舌や声帯や肺や大脳や呼吸よりもさらに遠いところ、さらに奥まったところから、つまり各人が盲者さながらに手を振り乱しつつ、とはいへ熟慮の上と信じ込みながらそれらの言い回しを引き出した吐き出す、名づけられ積み重ねられた経

験の貯蔵庫の裏側からやって来ている。唇で彼の頬にそつと触れてから静かに二、三のドアを閉め、一足先に仕事に出かける際、彼女がその奇妙でもあればお馴染みでもある姿を残していったのち、いやその時点でさえ、ますます重なる沈黙の中、その姿は彼の心象から消え去りながらむしろ全身に拡散していった。あたかも血液が、その往来の中で、触知しえないものを頑かたくなな物質に変え、それを新陳代謝して、細胞、組織、肉、骨、筋肉の内部に配置しうるのだとでもいうように。二杯目のコーヒーを手に、日陰になった隅からいまだ消えない夜露を観察しながらレトは、身体の方はまた別として、母親のことを忘れ去ってしまう。そして今、おおよそ一〇時頃、目抜き通りに居座るその湿った影、彼の身体を世界の透明な第一の層さながら包み込み、そこをさらに晴れわたる朝が包む、まさしくそんな影に接して彼はまたあの姿を思い起こし、さらには、注視の微小なサーチライトが時折表面に煌めき、不安定に移ろいゆくその心象の薄板に、あの姿を映し出す。いわゆる確実な話、イサヘルがあの不意の謎めいた言葉を発するに至ったのとまさに同じ理由に駆り立てられて彼は、今しがた突如バスを降り、並木通りを渡り、タバコを買い、なんとなく、南へと歩きだしたのだ。

一五メートルごとに、ティバ〔マメ科の高木科〕の木が歩道の縁にそびえ立ち、その枝は、反対側の歩道に同じ高さでそびえるティバの枝とほとんど触れ合わんばかりになっている。それほど生い茂ってもいない枝ぶりが作り出す隙間からは青空のかけらが覗のぞき、車道と向かいの歩道では日陰の空間より日なたの区間の方が多い。可愛らしい形に、ありとあらゆる色をまとい、一定の速度で、車が両車線を行き交う。レトの方に向かう形で、彼が反対方向を行く歩道沿いにやってくる車と、まさにその方向を、反対側の歩道沿いに進んでいく車。これらの車が並木道を移動するにしたがい、陽光の煌めきそして木の葉と枝の

影とが交互に素早く、クロームの車体の上、塗装されたボディとウィンドーの上に展開する。他の通行人たちは——中心街から遠いのと相対的に早い時刻もあり、多くはない——、一人あるいは集団で、考え事や会話に没頭しながら、歩道を行く。もう三〇メートルほど普通のペースで歩けば、レトは角に着くだろう。

これぞ、私たちも周知のとおり、朝だ。すべては常に同一の一度ひとなびなのだから無意味な物言いかもしれないとはいえ、いまひとたび太陽が、地球がどうやら自転しているせいで、東と言われる方角から、私たちが空と呼ぶ青色の広がりの中を昇ってゆくような錯覚を与え、徐々に、夜明け、曙光を経て、十分な高み、その上昇の中間点、としておこう、まで達したのであり、あの私たちが光と呼ぶものの強度ゆえに、その結果状態を、私たちは朝と呼び習わしているのだから。——とある春の朝、ふたたび、いやもちろん先ほど私たちが言ったように、すべては常に同一の一度ひとなびであるとはいえ、気温が上昇し、雲が消散し、何らかの理由で少しづつ葉を落としていった木々が緑に包まれ、ふたたび、いやこれも先ほど私たちが言ったように、同一、単一の「一度ひとなび」であるとはいえ、花を咲かせていて、いわゆる、昼夜平分点と至点で区切られた、さっき話したように、同一のこれ、ね？　の中で私たちがそれを「とある」と呼ぶのは、事物に名を与える私たちが知覚すると思しき種々の変化のために、これまでいくつも存在してきたように思えるからだ——三、四日前から、徐々に暖かさを増し澄みわたりゆく空から冬の最後の面影を洗い流した九月と一〇月の直近の雨ののち、形成されてきた、明るく輝く、とある春の朝だ。レトの調子はよくも悪くもない。彼は朝の中をぼんやりと、彼に一定の波長で騒音や肌触りや輝きや匂いを送り与える物質的領野の中心を歩く。彼はその領野の中に没入しているが、同時に彼はその領野の

中心でもある。もし、突然、彼が消えてしまえば、中心も場所を変えることになるだろう。

まさにその理由から、つまりあの男ひとがそんなに苦しんだのだということを確証すべく、彼女は三カ月ほど前右胸に例のしこりを発見してみせたのだった。何だかセンダンの実みたい、そんな思いに彼女は取り憑かれはじめた。チャロという名の、恋人も夫もないために、四五歳にして大半の病気に關するおおよその知識を習得しては他の物事への好奇心やハサレド女ハ飽セド・レン・サテイキ足ラズグの泥沼を紛らわせている教師の従姉妹が、専門医にかかるよう強いた——大物なのよ、とチャロ叔母さん、だが実のところは単なる又従姉妹、は褒めちぎった。レトは考える。「打ち明けた相手がチャロ叔母さんでよかった。まるでばん引きの目の前で、小金があるからホステスにでもつき込もうかなと仄めかすようなものだし」。

国際会議、診療所の待合室で古雑誌をめくるガン患者候補の列、ロータリークラブでのディナー付き講演会のせいで、専門医が応接したのはひと月後のことだった。細心と熟練をもって視診、触診したのち、彼はここに心あらずといった調子の快活さで、所見ではまったく心配いりません、これ以上の精査も生検も必要ありませんと告げた。イサベルによればセンダンの実ぐらいの大きさ、何やら不明瞭な、自分でも不明な理由でそれを触診したチャロによればどんぐり大のそのしこりが、専門医の熟練した指の前にもその姿を現すことはなかった。その指はどんなに探したところで一切の異常な固いしこりも、逆にもういささか張りを失ったイサベルの胸に、発見することはなかった——右胸にも左胸にも。専門医はデスクに向かつて座りカルテに記入を始め、イサベルは寝椅子の付近で立ったまま服を着ながら、暗黙の意図に満ちた聞き込み調査を開始した。専門医の方は短く曖昧に答えるばかりで、その意味は、ちょうど心理テストのあの染みのように、あらかじめ観察者の心の中に存在するもの次第で決まるものだった。